

一〇二二年五月二一日

推敲に倦みていつしか三尺寝  
柿若葉雨の上がりし散歩道  
川下る棹の捌きや新樹光  
木漏れ日と鳥語に和む夏館  
鳥語降り注ぎやまずよ夏木立  
夏木立歩みをとめて鳥語聴く  
苔庭に影打ち重ね若楓  
葛餅や宇治十帖の和歌の皿  
老いてなほ夢をつながむ更衣  
庭にてて月命日の薔薇を剪る  
噴煙を呑み込まんとす夏の雲  
亡き夫の郷降りたてば若葉風  
神苑の杜明るうす若葉雨

素秀  
こすもす  
かかし  
たか子  
鳥語降る下闇深く義士の墓  
月涼し闇より黒き喪服かな  
水際に松風通ふ植田かな  
むべ  
素秀  
はく子  
よう子  
ぽんこ  
わかば  
たか子

新茶いれ昔馴染みの輪の和む

たか子

悉くヒマラヤ杉や木下闇  
南禪寺見渡すかぎり青楓  
祠へと続く小道は竹の秋  
鳥語降る下闇深く義士の墓  
月涼し闇より黒き喪服かな  
水際に松風通ふ植田かな  
むべ  
素秀  
はく子  
よう子  
ぽんこ  
わかば  
たか子

毎週句会秀句・みのる選・一〇二二年五月二二日